



インタビュー

# 夢の実現 周りの人に支えられて

横浜ベイスターズ 鈴木尚典さん

すずき たかのり

すずきたかのり

1972年4月10日生まれ。静岡県出身。  
横浜高校から90年のドラフトで横浜大洋ホエールズ（横浜ベイスターズ）入団。98、99年と2年連続首位打者を獲得。01年9月14日、100本塁打を記録。02年までの通算打率は3割1分4厘。川崎市中原区在住。

横浜高校から横浜ベイスターズに入団。2年連続首位打者に輝き、ベイスターズの38年ぶりの日本一に貢献するなど、プロ野球を代表する打者の一人として活躍する鈴木尚典選手にこれまでの思い出や社会福祉との係わりを聞いた。

「静岡の中学から横浜高校へ進学しました。静岡にも甲子園で活躍する高校が数多くある中、横浜高校野球部を選んだ理由は。」

「浜松のリトルやシニアリーグでお世話になった監督さんが横浜高校の渡辺元智監督の指導力を高く評価しており、野球を続けるなら横浜高校がいい。真剣にやるなら環境のいいところで、と勧められました。浜松でも横浜高校は有名でしたから、自分でも進学したい学校の一つでした」

横浜高校では1年からレギュラーで出場。2年の夏に甲子園出場を果たした。高校通算718打数341安打。通算打率4割7分4厘、39本塁打の数字を残し、高校球界屈指のスラッガー（強打者）に成長、ドラフトでも注目された。

「子供のころから遊びは野球だけ。漫然とした希望でしたけど、プロ野球選手になれたらいいな、と野球に明け暮れました。高校に入ると、回りはさすがにすごい選手ばかりでしたけど、早い時期から4番を任せられ、

プロ野球選手を本気で意識しました。しかし、プロにはドラフト制度があり、選択されないと入れない。自分ではある程度納得いく成績を残せたが、3年の夏を終えてからは、ドラフト会議まで、心ここにあらずの状態です。体を鍛

えていましたが…」

「1990年のドラフト会議でベイスターズの前身「横浜大洋ホエールズ」に指名を受けました。そのときの気持は？」

「野球を始めた小学校2年のときからの夢が実現したんですから、うれしかった。それも地元、横浜の球団から。たしか、指名後のインタビューでクリーンアップを打てるホームランバッターになる、と答えたことを覚えています」

「プロの世界に飛び込んでみて、実際にスター選手と接した印象はどうでしたか。」

「打者では高木豊さん、田代富雄さん、屋鋪要さんがバリバリやっているし、投手では遠藤一彦さんや2年目の佐々木主浩さんがいたりして、高校時代に比べてスピードが違いました。想像はしていたことでしたが、こんな人たちの中に入って本当にやっけて行けるのか、不安がなかったらうそになります。2軍からのスタートでしたが、1軍選手目指してがむしゃらに練習しました。とにかく練習と2軍の試合（イースタンリーグ）で

力を認めてもらわなければ1軍に上がれませんから必死でした」

「1軍で100試合以上出場したのが96年から。それから、2年目の98年から2年連続首位打者に輝いた。なにかきっかけがあった？」

「高校の渡辺監督は、プロに入ってから4年間は大学に行ったつもりで結果にこだわらずに励め、とアドバイスをいただいた。この言葉を守って、焦らずに野球に取り組めたことが良かったと思います」

「オールスターに4回出場。1000本塁打、1000安打も記録、一流選手の仲間入りを果たしましたが。」

「けがや不振もあったが、ここまで順調すぎるかもしれない。プロでやっている体や環境をくれた両親をはじめ、野球を指導して下さいました方たちのお陰です。感謝の気持ちは忘れないようにしたい」

「感謝、という言葉が出ましたが、社会福祉活動に関心があり、実際に活動を展開していると聞きますが。」

「プロ野球選手の中には、シーズンを通して指定席を確保して、福祉施設の子供や障害のある人たちを招待したりする選手が多くなります。僕も一人でここまで来られた訳ではなく、周りの人の支えがあったからと思っ、少しでも社会のためになるなら、と

考えて、ささやかですが横浜スタジアムのシーズン席を選手会長の石井琢朗さんと一緒に確保して、招待しています」

「ところで、赤い羽根の共同募金に協力したことがありますか。」

「駅前などで赤い羽根を持って協力を呼びかける高校生などボランティアの姿を見ますが、恥ずかしさと、格好つけて、と見られはしないか」と思い、募金箱に直接寄附をしたことはありません。しかし、良いことをするのに他人の目を気にする必要はない、と思えるようになってきました。これからは、赤い羽根に限らず、機会があれば福祉活動に率先して協力したい。僕らが協力することで、他の人たちも協力しやすくなると、プラスに考えて行動したい」

「今シーズン、チームにもう一つ勢いがありませんが。」

「これから頑張ります。98年の優勝で横浜全体が活気づいた。あのときは、すごいエネルギーを感じ、勝負に勝つことで市民の皆さんに元気が与えられることを実感。大きな意味でいえば、プロは勝つことも福祉活動と同じだと思いました。シーズンは残り少なくなりましたが、みなさんの応援をよろしくお願いします」



開き手 岩崎隆久  
(神奈川県新聞社運動部)